

社会関係資本(ソーシャルキャピタル)と生涯学習

川口 一美

はじめに

現代の社会は個の時代と言われる。これは、2つの意味がある。一つは良い意味で、「個」を尊重し、個性を認めるという意味だ。もう一つは、「個」は孤立や関係の希薄さを示している。社会的にも少子高齢社会のまっただ中で、核家族化が進み、高齢化の最後の上り坂を経て、2050年までの間の高齢者人口が最も増える時期にさしかかっている。

そんな中社会を見渡せば、様々な孤立が根底にある問題が後を絶たない。戦後の急激な寿命の伸び、高齢化、核家族化に伴い起きてきたその問題に対して、より良い生活を求め、生涯学習の中で、福祉の中で私たちは町作り、地域づくり、関係作りを意識的に行う方法はないのだろうか。

今後、私たちを取り巻くこの問題に対し、今何ができるのか。本稿では、現在の「個」の時代をより良く生きるためにできること、生涯学習から人の繋がりをつくることでこの問題を改善できるのではないかと考え、生涯学習を活用した人間関係づくり、環境作り、人づくりの社会関係資本の構築という点に焦点を当ていきたい。

1. 生涯学習が私たちにもたらすもの

生涯学習は、私たちが人間らしく生きるため、また一人一人が継続的に学習を行い、自らを育て高め、社会の変化に対応し新しい知識や技術を身につけ、人生における生きがいをもつためのものである。生涯教育は子どもから大人まで行われ、多くの方が発達課題に応じた学習機会に恵まれ、生きがいを発見し、(学び、人、地域)と出会う機会を得ることができる。

生涯学習という言葉は、一般的には人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち学校教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習の

意味で用いられる。また、生涯学習社会を目指そうという考え方・理念自体¹を示している。また、生涯学習社会の構築が必要な理由として、社会・経済の変化に対応するため、また自由時間の増大に伴う心の豊かさや生きがいのため等が言われている。

意欲的な学習者が生涯を通じて学び、それが他の人や地域に連鎖し、それがひいては「町づくり」、「人づくり」に繋がり、地域内の横の関わりを作っていく。また、生涯学習は相互の関わり、学習により、いろいろな世代の人と交流し、男女がともに学習することで縦の繋がりも作り出す。

とりわけ、近年社会に対して、自身の生活に対していかに向き合うべきか、私たちが持っている様々な問題に対する危機意識が学びへ向かわせる。

福祉の制度を活用しても、福祉の専門職を増やしてもこの問題に対応するには限界がある。私たち自身の日々の積み重ねによって私たち自身の生活や地域社会を変えていくきっかけとなる。そのためには私たちが生涯を通じ学習すること、自身の問題や地域の課題について積極的に学習し関わること、これが自分自身の生活や人生、ひいては地域社会の活性化、現在の問題の改善に繋がる。

2. 生涯学習のフィードバック

生涯学習の場には、個々ばらばらの年齢、性別、背景を持った個々人が血縁地縁に関係なく、問題意識や興味関心に基づきまなび、繋がりを求めて集まる場という根底がある。そのような強制的でない弱い繋がり(弱い紐帯)は人間関係の希薄な現代社会にもマッチし何より弱い紐帯のもたらす効能が、学習やその後のフィードバック(活動)を推し進めると考えられる。

生涯学習には、3つの形態がある。一つは入力型活動で、自身に知識や教養、技術を習得していく学習。二つ目は、出力型学習で、学習した知識、技術等の成果を外に向かっ

*1 平成18年度版 文部科学白書第2部第1章1節生涯学習の意義

て発揮していく学習。三つ目は、交流型活動で、相互交流をし、その中で学び学習者となっていく学習である。

生涯学習で学んだこと、得た知識を実際の生活の場、地域で還元することそれにより、やり甲斐、生きがい生まれ、また学習へと繋がっていく。学習者は、いろいろな活動を体験し、それによって出会う人たちも増える。また、様々な情報を得て、それを活かすことによってより情報のアンテナ、人との繋がりが増えていく。

例えば、手始めに地域の公民館や自治会、コミュニティセンターの掲示板をチェックする、市町村の広報誌をチェックする、ネット等からの情報収集、仲間からの情報提供など様々なものから自らの学びをフィードバックしたり、次の学習のきっかけを作ったりする。

例えば、自身が生涯学習の学習者として学んだことを自分から発信する、活用することがフィードバックとなり、またその発信した、(実際に行った)ことからの疑問や課題をまた生涯学習の場で学ぶ。

その繰り返して弱い紐帯が地域に広がっていくと考えられる。

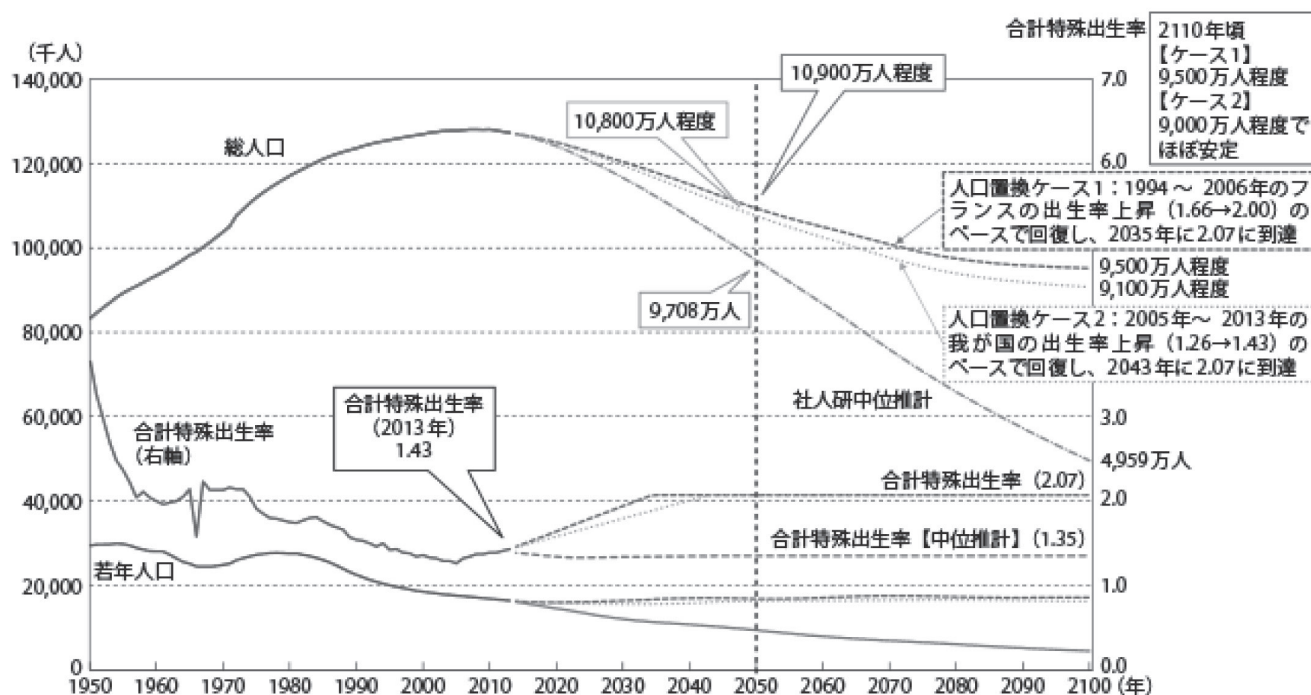
3. 少子高齢化と生涯学習

1) 少子と生涯学習

現在は少子高齢社会であるということは先にも述べたが、少子化で孤立が進む背景として、核家族化による家庭の人数の減少があげられる。(図1) また、女性の社会進出も進み地域における従来の女性の横の繋がりが、近所づきあいも希薄になっている。また、生活が多様化し、余暇は増大し、いつでもどこでも学べる時代に、地域の生涯学習の場の役割は減ったように思われた。しかし、生活に直結する問題に対応するには、その地域の関係性づくり、社会資源づくりが重要になってくる。

そんな中で日頃の悩みや問題を改善する方法、地域の中の関係性をつくり、地域自体が問題解決能力を蓄える(社会資源が増え、対応できる)そのための方法の一つとして生涯学習が考えられる。とりわけ、現在の生涯学習は、学習内容も豊富で、学習は本来の学習の場に行く学習もあれば、情報端末、などでいつでもどこでも学習をすることもできる。

学びたい、誰かとかかわりたい(つながりたい)、悩み



(注) 1 「中位推計」は、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」の中位推計(出生中位、死亡中位)。その他は同推計の年齢別出生率の仮定値と2013年の生命表による生残率を用いた簡易推計による。「中位推計」と簡易推計の乖離率を乗じて調整。各ケースの値はそれぞれの合計特殊出生率の想定にあうよう出生率仮定値を水準調整して試算。
 2 「人口置換ケース1(フランスの回復ベース)」: 2013年男女年齢(各歳)別人口(総人口)を基準人口とし(合計特殊出生率1.43)、1994~2006年におけるフランスの出生率の変化(1.66から2.00に上昇)の平均年率(0.03)ずつ出生率が年々上昇し、2035年に人口置換水準(2.07)に達し、その後同じ水準が維持されると仮定した推計。
 「人口置換ケース2(日本の回復ベース)」: 2013年男女年齢(各歳)別人口(総人口)を基準人口とし(合計特殊出生率1.43)、2005年~2013年における我が国の出生率の変化(1.26から1.43に上昇)の平均年率(0.02)ずつ出生率が年々上昇し、2043年に人口置換水準(2.07)に達し、その後同じ水準が維持されると仮定した推計。

資料) 1950年から2013年までの実績値は総務省「国勢調査報告」「人口推計」、厚生労働省「人口動態統計」。推計値は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」、厚生労働省「人口動態統計」より国土交通省作成。

図1 わが国の人口推移

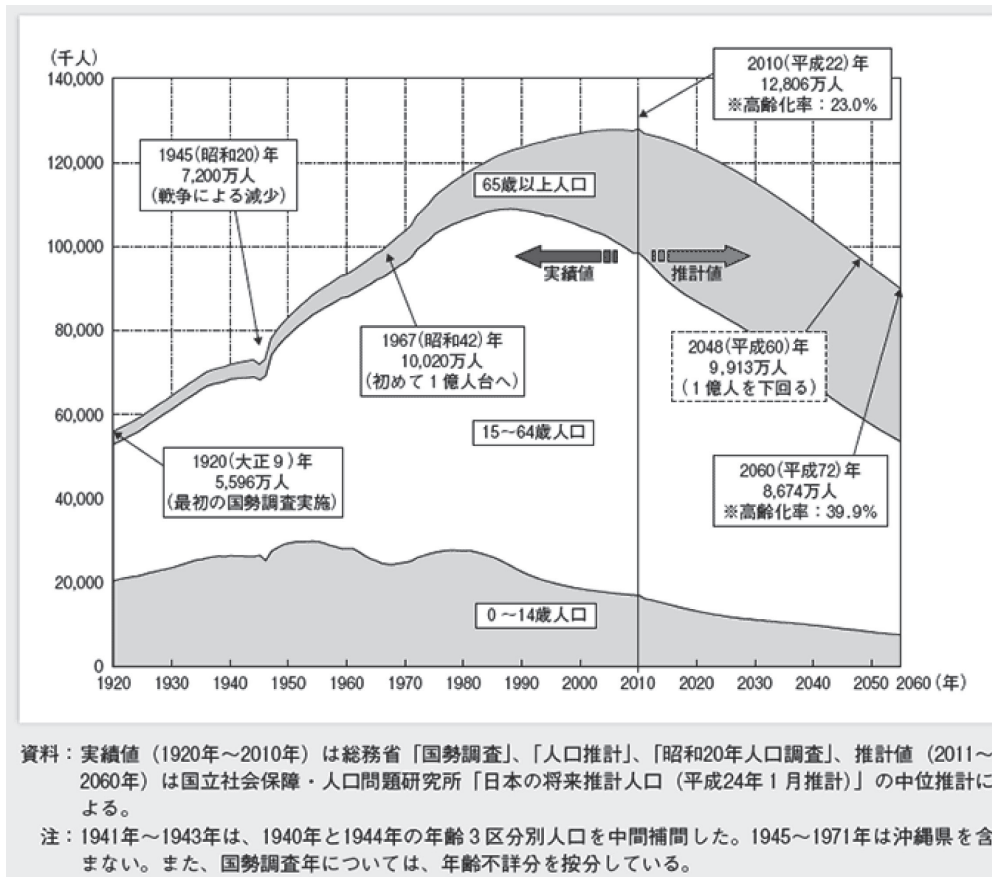


図2 人口構造の変化

を解決したいなど様々なニーズに対して老若男女がアクセスできるという点で、生涯学習の機会があるということを知っていて、そこに自ら踏み出す気があれば、結びつくことが出来る。

現代は多くの人が人間関係の希薄や孤立の背景の中で多くの問題を抱えている。貧困、育児、介護、孤立などどれも誰でもその問題に直面する可能性がある。また、生きがいや甲斐について考える機会も長い人生の中で突きつけられる機会もあるだろう。（図2）

とりわけ、年代や性別により抱えやすい問題についても先の研究でわかっている。よって、その時期、そのことについていかに事前に対応するか、またそのことについていかに対応するか（使える社会資源を総動員して）が問題になる。

2) 女性と生涯学習

全ての人が当てはまるわけではないが、女性に関しては、例えば結婚、出産後の孤立や子育て、介護に関する不安等が考えられる。近年では少子・晩婚からWケア（子育てと介護が同時にくる）、また少子の背景から、一人っ子同士の結婚により、親の介護が次々にのしかかるなど、様々な制度がある中でも頭を悩ます問題と言える。また寿

命の延びに伴い、未婚や非婚、配偶者亡き後の自身の老後に関する不安を持つものも多い。

これまでの日本の社会では、家族内で役割分担できたこと、また地域ぐるみ、ご近所ぐるみで支えることが出来ていた。しかし近年、関わり希薄さや社会構造上の問題、価値観の変化ゆえ出来なくなっていることもある。特に女性に関して言えば、地域の中で生活できる、やっていけるすがこれまではあったが、現在は育児や高齢期の生活に（関係性や経済的な問題で）不安を抱えるものは多い。

よって、これらの問題に早くから取り組む、関係性を構築するため、自身の学習の機会や問題を抱えたときに活用できる知識や資源が必要であると言える。

3) 男性と生涯学習

男性の抱える問題として、地域といかにかわるかという事がキーワードになる。社会に出て働いている間は、地域との関わりが薄く、いざ定年を迎えたときに問題を抱えるケースは少なくない。定年前から準備教育を行っている企業も多いが、地域との関わりまでを含めた定年後のソフトラディングは難しい。

よって、男性と地域の関わりをいかに築くかまた、定年

を待たず、いかに地域の中にも生きがい、やりがいを築けるかが課題となる。自分をいかに地域の中におき、地域人として生きることができるか。職場以外の関係性の多さが自分の生活を充実させる鍵となる。

4) 高齢者と生涯学習

高齢者、65才以上の人のことを指すが、現在の65才はとてとてもアクティブで高齢者という感覚を持たない人も多いのではない。また周りにいる高齢者以外の私達も高齢者、老人とイメージする人と現在の65才の人にはズレがある。以前は高齢者＝弱者であったが、現在はその限りではない。もちろん老化が進んでいることは事実だが、資産を持ち、子育ても終わり、年金もあり、時間がある。(働いている高齢者も多いが) また、これまでの知識や経験が多くあり、社会の中で活動することが十分可能な高齢者もいる。高齢者に行った調査では、「高齢者とはいくつからだと思うか」という問に対し、70才、75才とする高齢者は多く、それまでは定年をしていたとしても現役であるという感覚を持っていた。

就職、結婚、子どもの成長、退職と人生が80年～90年あるなら、老後には老後は20年～30年と見込まれる。よって、自身がどう生きるかをデザインしておくことが必要な長さの時間であると言えよう。これは、私達が就職して、定年をむかえるまでの時間とほぼ等しいと言われている。

よって、元気な高齢者が地域の中で活発に活動することで、(活動自体が自分の生きがいややり甲斐に繋がるものであれ、地域に対する関わりであれ)、地域の抱える問題は改善できることもあるだろう。学習の機会を得て、その学習したものを、得たことを何らかの形で地域や社会に還元することができたら強大な社会資源、マンパワーとなる。

5) ニーズに伴う生涯学習の拡大

生涯学習は、これまでずっと社会の中で地域に必ずある誰もが学べる学びの場として、また人々をつなぎ、紡ぐたまり場として、様々な役割を担ってきた。今後はより様々な課題を解決する一つの方法として注目、活用すべきであると考えている。

なぜなら生涯学習は、時代の要請にともない学習の機会や内容、対象を広げてきたからだ。例えば1970年代の生涯学習の特徴として、人口高齢化に対する危機意識から高齢者学級等が急速に広まりはじめる(体操や趣味、実技など健康増進や生きがいづくりが多い)。1980年代に入っては、現代社会を読み解く内容のものや自身の人生を意味づけるための学習が注目される。1990年代に入ると、自分

たちで地域の問題に取り組む、自分たちで地域を変えるなど自らの周りにある、地域、環境への働きかけが増える。2000年以降は、これまでも(元気な)高齢者は学習の機会を持ち合わせていたが、地域リハビリ、介護予防などこれまで対象となりにくかった対象者も対象範囲となった。また、どう生きるかのみならず、現在では死の学びすらも考える場となっている。

上記の様に生涯学習はたまり場として、また自分や他者と向き合える場として、人との接点として、またソフトラッキングの場として、今後の人生を考える場として生涯学習の内容、範囲が時代やニーズと共に拡大し柔軟な広がりを続けていることがわかる。

特に生と死について家でかかわることが減っている現在、生と死について考える機会を設けることで、私たちの人生のその部分について考えるきっかけとなる。また、そこへたどり着くまでの過程についても具体的に考えることができるであろう。家族内、地域、社会での交流の減少(同じ世代も異世代間も含め)は、現在の様な問題を抱えたままの行き場のないジレンマや孤立感、孤独感を生み出す。人との関わり、交流を通じて、意欲が高まったり、生きがいややりがいがうまれる。自らの中の意欲や抱えている問題へ対応しようとする知識や技術が増え、エンパワメントされる。

4. 現在の地域を取り巻く問題

実際の地域の中でどれくらいの方が問題を抱え、関係性の希薄に悩んでいるのだろうか。ここに2014年11月に行ったY団地の住民調査の結果がある。この団地は、首都圏のベッドタウンに位置し、約3000世帯を有する緑豊かな団地である。団地自体は古く立地的にも必ずしもアクセスの良い場所ではない。しかし、これまで住民とりわけ自治体が団地内の問題に積極的に取り組むことで様々な問題を解決してきた。この団地を終の棲家にできる、安心して暮らせる団地にするための努力を重ねてきた団地である。そんな団地であるが、少子高齢化の波には勝てず、折からの不景気や生活課題を抱えた人が増え、関係も希薄になってきた。県下で1位2位を争う高齢化率の高い地域である。この団地で生活する人々は今何を問題と考え、どのようにこの問題を対峙しようと考えているのかをみてみたい。

現在では空き部屋もあり、自治会等への加入や関わりをしない世帯も増え、かつ出入も激しく、(自治会では)実際の世帯数すら把握できない、ご近所の世帯がどんな人なのかまたは、いないのか等もわからない場所すらある。これまで築いた関係やネットワークで対応できる部分とそう

でない部分ができ、ネットワーク上に乗ってこない部分への関わり、問題解決が課題となっている。この団地の自治会は自分たちの団地を自分たちの手で何とかしたいという熱意のある団地で、これらの問題の突破口を現在探している。

今回は団地への全戸調査で、3000戸を予定し、世帯主への回答を求めた。実際の配布は2700戸（空き部屋として確実にわかっている300戸については、実際に空き部屋の確認をし、配布はしていない）450戸の回答があった。

その中で、団地内の付き合いについて聞いている。①ここでは親しい友人がいるか、②団地内に困ったとき相談できる友人や知人がいるか、③けがをした場合など助け合える友人知人がいるか、④団地内で顔見知りか10人以上いるか、⑤団地内で様々な支え合い活動をしているのを知っているか等を聞いている。これらについては、はい、いいえがほぼ半々であると言える。よって、地域内の関係においては、関係のある（ネットワークを持っている）人と関係の希薄な（ネットワークのない）人たちがいる事とりわけ、②の団地内の友人知人については、「いいえ」とするものの方が多い。また、けがをした場合など②助け合える友人知人についても「いいえ」とするものの方が多かった。よって、顔見知りでは合っても何かしらのやりとりをするのは難しいと思っている、もしくは助けてもらいたいときに声をかけにくいと感じる人がいることがわかる。ただし、団地外の家族に相談事、困りごとについては相談するとし

ているものが多いので、一概に「いいえ」としたものの関係性がないとは言い切れない。（図3）

加えて、周りに自分に対してかかわる人がどれくらいいるかという問（①一緒にいて楽しく時を過ごせる人がいるか、②出かけて留守にするときにちょっとした用事を頼める人がいるか、③あなたに気を配ったり思いやったりしてくれる人がいるか、④困ったことがおきたときに気軽に相談できる人がいるか、⑤寂しいときに電話をしたり訪ねたりしておしゃべりできる人はいるか、⑥あなたを元気づけてくれる人はいるか、⑦あなたを大切にしたり、高く評価してくれる人はいるか、⑧心配事や不安があるとき親身になって助言をしてくれるか、⑨病気で寝込んだとき、身の回りの世話をしてくれる人がいるかについては、やはり先の質問と同じく、自分との関わりを持つ人がどれくらいいるかがわかる。②ちょっとした頼み事ができる人がいないが、147名と高く、日頃の関係はあるものの実際に何か一歩踏み込んだお願いは難しいのだと言うことがわかる。また、どの質問②対しても「全くいない」とする数が今スタンスにいる事からも地域の中で孤立する可能性も見て取れる。（図4）

これから団地に必要な援助については、子育てに関する事、まちづくり、高齢者に関すること様々なニーズがある。とりわけ高齢者が多い団地という背景もあるが、その地域ですっと住み続けられるようなサポートを求めていることがわかる。（図5）

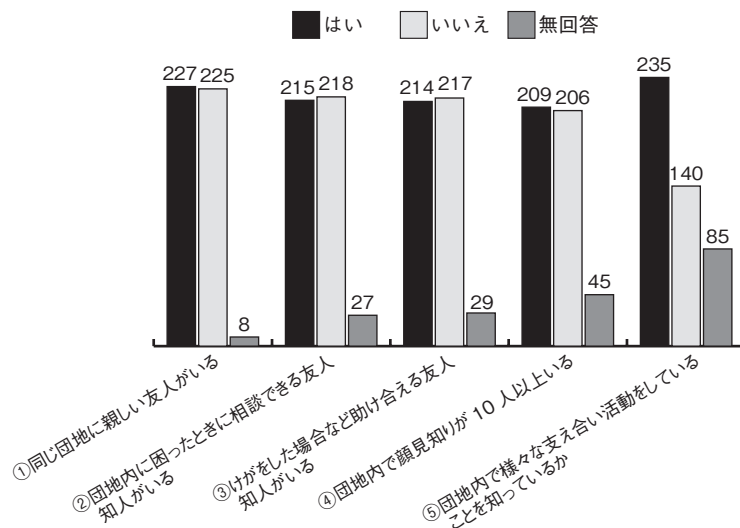


図3 あなたの団地内の付き合いについて（人）

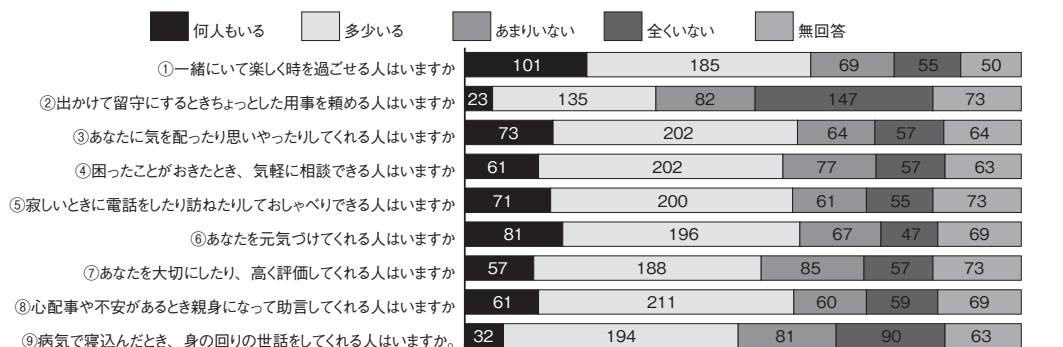


図4 周りの人的資源(人)

図5 これから必要な物的資本
これからの団地に必要な援助

子育てに関する事

子どものたまり場	39
子どもを預けたり預かったりするサービス	99
子どもに関する情報の提供	50
子どもの心のケア	40
親同士のたまり場	32
子どものイベント	70
子どものまちづくり	30
食育や伝統産業の紹介	25

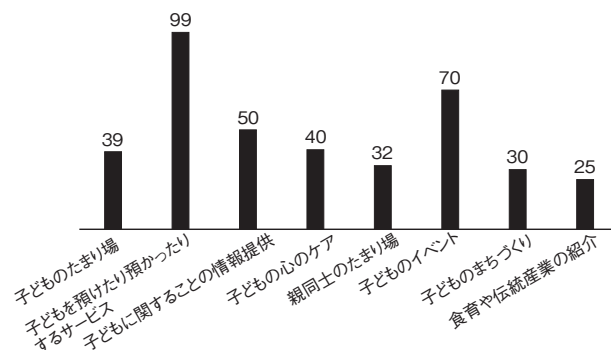


図5-1 これからの団地に必要なこと(子育てに関する事)(延べ人数)

まちづくり

空き店舗活用	129
まちづくり・町おこしイベント	51
町の探索	20
福祉マップ	109
安全マップ	98
防災マップ	123
ボランティア(肢体・探したい)情報	54
まちづくりの企画立案	44

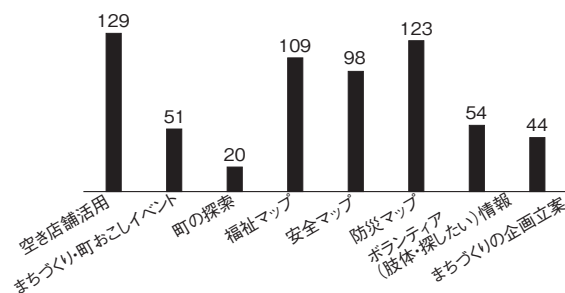


図5-2 これからの団地に必要なこと(まちづくり)(延べ人数)

高齢者に関する事

1人でも生活できるサポート	245
見守りサポート	149
安心連絡網	130
ちょこっとボランティア	14
交換ボランティア	24

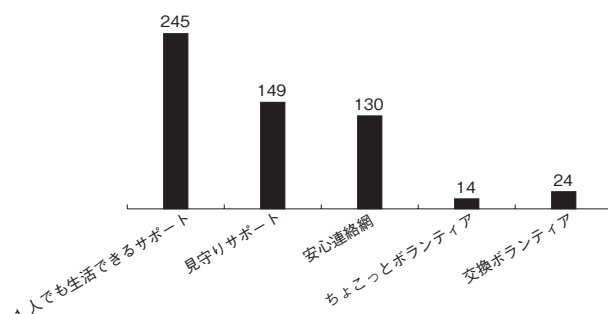


図5-3 これからの団地に必要なこと(高齢者に関する事)(延べ人数)

そのためにはやはり家族や兄弟、親戚といった強い紐帯も大切だが、そこに暮らす限りそこでの関係性は密な方が住みやすいと言えるだろう。以前の様な深い繋がりを地域や社会に求めなくなったが、困ったときには助け合いたい、と考えている。また「この地域で住み続けるために必要なことは何か」という問に対し、金銭が30%（155名）、次に住民同士の交流（近所付き合い）28%（149名）、次に公的支援21%（112名）、家族、親族の支え16%（82名）であった。

つまり地域の繋がりはいざというときの頼みの綱としての安心感であると言える。

5. 世代を超えた生涯学習の学びの効能、社会関係資本

世代を超えた学びは、おのおのの知恵や経験を集団学習の場で、活かす縦の学習である。単に教えるもの－教わるものという形ではない相互の学びができるのは地域社会にある資源が集うからであると言える。

そもそも生涯学習が現代社会の問題に対して、有効な手段の一つであるという理由は、生涯学習自体が、学習をすることで人々を緩くつなげていくことに由来する。元は意欲のある学習者が生涯学習の場に訪れ、つながり、学んだことを地域や社会の中で還元することで、もともと関わりの無かった（ここでは孤立したり問題を抱える人）人との繋がりが出来る、その連鎖が社会や生活を変えていく。その関わり自体こそが「社会関係資本（ソーシャルキャピタル）」と言える。ロバートパットナムによれば、社会関係資本は「ネットワーク（社会的繋がり）」「規範」、「信頼」といった社会組織の特徴で、共通の目的に向かい強調行動を導くものとし、物的資本、人的資本（教育によってもた

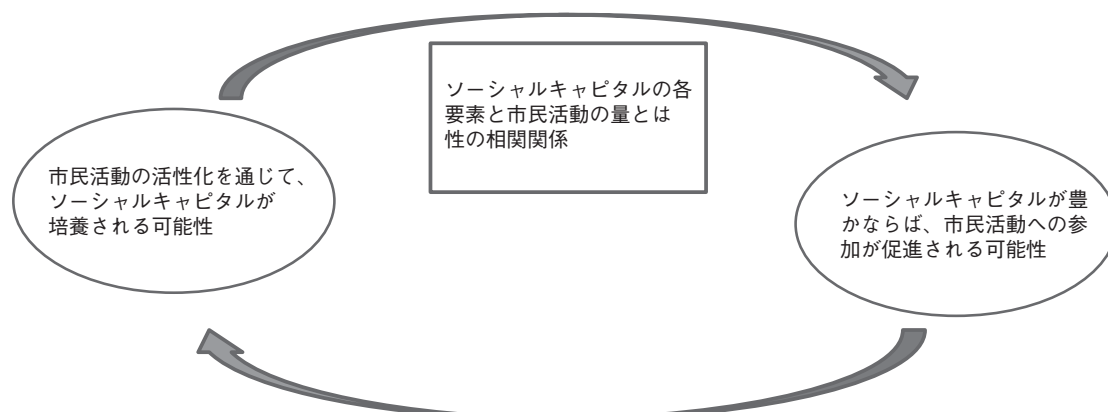
らされるスキル・資質・知識のストックを表す個人の属性）を含めた概念である。

昨今の研究でも地域社会における人的ネットワークとその社会的連携は、社会関係資本を蓄積させ、それによって、地域社会の安心・安全・安定に好ましい効果をもたらすという事が言える。

平成14年度の内閣府の調査でも社会関係資本（ソーシャルキャピタル）が豊かな地域ほど失業率が高く、出生率が高いという関係が得られたという。（図6）ボランティア活動が活発、市民活動が活発であれば、社会関係資本（ソーシャルキャピタル）は互いに高め合う関係であると認められる。（図7）また、信頼できる仲間や理解者がいる事で、信頼できるネットワークである社会関係資本（ソーシャルキャピタル）を拡大する原動力となり、自発的な市民活動の発展に結びつくという好循環をもたらすと言える。

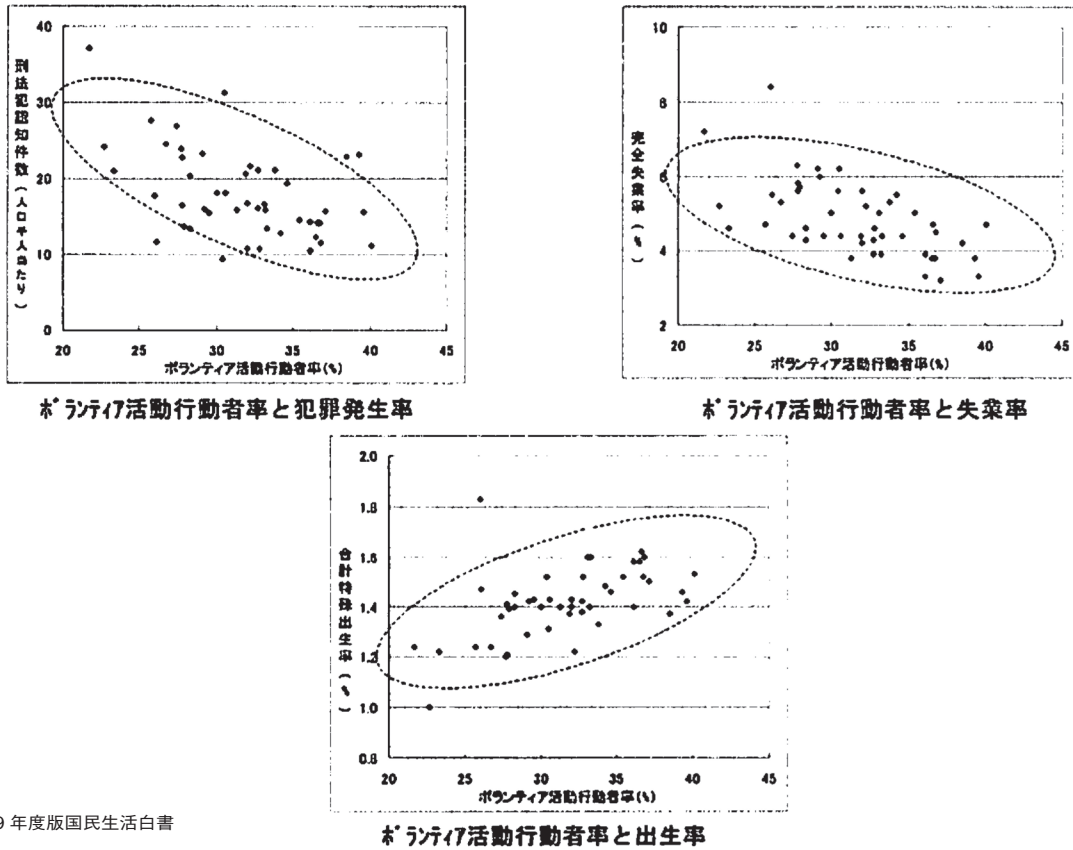
また、地域社会の弱い紐帯が、地縁や血縁などの強い紐帯（繋がり）よりもネットワークとして地域社会の中で機能することも考えられる。とりわけ強い紐帯は現代社会の中で望めない部分もある。（例えば家族がいない、地域と関わりがない場合は、この紐帯からこぼれ落ちてしまう）よって、次のネットワークとしてこの弱い紐帯を学習者が地域で紡ぎ、そのネットワークで孤立した人や問題を抱えた人と繋がることのできる可能性になると考えた。

「弱い紐帯の強み」とは、マーク・グラノヴェッターが1973年にThe strength of weak tiesの中で発表した仮説で、新規性の高い価値のある情報は家族や親友、同じ職場の仲間のような強いネットワーク（強い紐帯）よりも、知り合いの知り合いやちょっとした知り合いなど弱いネットワーク（弱い紐帯）によってもたらされる可能性が強いというものだ。



出典：コミュニティ機能再生とソーシャルキャピタルに関する研究調査報告書より抜粋、筆者作成
（内閣府経済社会総合研究所編 平成17年8月）

図6 ソーシャルキャピタルと市民活動の関係



出典：平成 19 年度版国民生活白書

図 7 ソーシャルキャピタルと犯罪発生率，失業率，出生率

生涯学習を通して学んだことを活かし、地域内の活動に用いれば、ちょっとした関わりでネットワークができ、様々な情報が手に入る機会ができることを意味するのではないかな。制度からも強い紐帯からもこぼれ落ちてしまった人や問題を取り上げ、解決に向かわせる一步になると言えよう。(表 1)

6. 今後の取り組みと課題

現在の地域の抱える問題と生涯学習が出会い、人づくり、町づくりが進めば、今回見てきたような日本の抱える問題は、改善されると考える。ただ、そのためには私たち自身が学習者となる必要を感じ、積極的にそれを求め学び、(積極的ではない人や地域)周りを巻き込んで行く必要がある。そのためには、そのようなことができる生涯学習や生涯学

表 1 ソーシャルキャピタルの構成要素と個別指標

構成要素	サブ指標	個別指標
1 付き合い・交流	近隣での付き合い	①隣近所との付き合いの程度 ②隣近所と付き合っている人の数
	社会的な交流	③友人・知人との付き合いの頻度 ④親戚との付き合いの頻度 ⑤スポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況
2 信頼	一般的な信頼	⑥一般的な人への信頼
	相互信頼・相互扶助	⑦近所の人々への信頼度 ⑧友人・知人への信頼度 ⑨親戚への信頼度
3 社会参加	社会活動への参加	⑩地縁的な活動への参加状況 ⑪ボランティア活動率 ⑫一人あたり共同募金額

出典：平成 19 年度版国民生活白書

習の場を広く知らせるとともに、一人でも多くの学習者を増やすことが課題となる。

自分らしくより良く生きたい、やりがい、生きがいをもって日々を過ごしたい誰しもが思うことだろう。それを他力本願ではなく自分自身で学ぶことで開ける未来があるということ、これを今後地域で広め、活動し現在の地域の問題、ニーズ、そして孤立した人々が少しでも減る、住みやすい社会を目指したい。

誰しもが今後孤立する可能性をもつ現代社会だからこそ皆が弱く繋がりながら（誰かだけの負担が増えるのではなく）より良く生きる方法を模索する必要があるのではなかろうか。

今後は生涯学習や活動の成果が地域において実際にどれくらい進むかを地域の中で追っていきたい。

本研究の調査はY団地住民と自治会また、T団地自治会と住民の協力がなければ成り立たないものである。協力に感謝申し上げたい。

本研究は科学研究費補助金基盤研究（C）26380685の成果の一部である。